

- 目指す学校像
  - 育てたい児童像
- キリスト教精神の隣人愛を基に、日本文化を理解した上で、グローバル社会に貢献できる児童の育成を目指す。
- ① 奉仕活動や学校活動を通して、他人を思いやる心や行動を養う。
  - ② 一人ひとりの児童にとって、主体的・能動的な学習が成り立つ力を養う。
  - ③ 身の回りの現象を題材にしながら、教科の枠をこえた探究学習で、探究力、思考力、コミュニケーション力や表現力を養う。
  - ④ 母語の日本語を重視した上で英語イマージョン教育を行うことによって、二言語習得を目指し、多様な見方や場に応じた思考・判断ができる人材を育てる。
  - ⑤ 主体的に学んでいく力や自信をもって挑戦していく自己効力感の高い人材を育てる。

「自己評価」及び「評価」欄の評価：S「優れている」、A「良い」、B「おおむね良い」、C「要改善」

項目	自己評価	中長期目標	今年度の目標	取組内容	評価指標	自己評価			学校関係者評価	評価
						中間評価	達成状況	改善方策		
建学の精神	S ・ A ・ B ・ C	児童・保護者・教員が、建学精神である『隣人愛』を理解して、それを実践し、学校内外のすべての場で、学習・生活に取り組むことを目指す。また、探究・イマージョンといった本校の独自性を保ちつつ、こども園・中高・大学との整合性のあるキリスト教主義学校の学びの環境を充実させる。	本校の建学の精神を児童・保護者・教員が一体となって学ぶ環境を整える。 ・礼拝プログラムの基本形を定着させる。 ・聖書の授業内容を児童にとってより深い学びとなるように展開する。 ・キリスト教行事を充実させ、児童が体験を通して建学の精神を学ぶことができるようにする。 ・保護者会との連携を図る。 ・建学の精神を理解するための教員研修を定期的に行う。	児童 ①毎朝、礼拝をもって1日を始める。 ②礼拝の中で、日本語による賛美・お話し・祈りを加える。 ③聖書の授業を日・英両言語で行う。 ④花の日礼拝、クリスマス礼拝を実施する。 保護者 ⑤建学の精神の学びに関する保護者のかかわりを保護者会で検討する。 教員 ⑥建学の精神に関する研修を毎月1回実施する。	児童 ①毎朝の礼拝で1日を始められたか ②日本語を加えたことで礼拝が児童のものになっているか ③両言語で効果的な聖書の授業になっているか ④計画通りの花の日礼拝、クリスマス礼拝が実施できたか 保護者 ⑤保護者が建学の精神を学べたか 教員 ⑥建学の精神を学ぶ月1回の研修の効果があったか	児童 ①コロナ対策で映像付きの放送による礼拝になってしまっているが、毎日礼拝で1日を始めることができている。 ②日本語を加えたことで、内容の深いメッセージを児童が理解することができている。 ③両言語で行うことで、内容の深い授業展開ができている。児童は自ら考え、活発な意見を出すようになってきている。 ④花の日礼拝は/15に実施できた。クリスマス礼拝は12/18に予定している。 保護者 ⑤これまでのところ、保護者が直接建学の精神を学ぶ機会は作れていない。 教員 ⑥目に見える形の効果を示すことは難しいが、それぞれの教員が建学の精神を重んずる姿勢は育まれてきている。	児童 ①コロナ対策としての放送による礼拝を継続し、礼拝プログラムの基本形を定着させることができた。 ②日本語を加えたことで、児童の母語力を生かした内容理解ができた。 ③両言語で行うことで母語力に合った内容を扱えるようになり、児童は自ら考え、活発な取り組みができた。 ④花の日礼拝とクリスマス礼拝を昨年度よりも発展した形で実施し、児童が様々な活動を行うことができた。 保護者 ⑤行事のボランティアとして保護者の関わりがあった。 教員 ⑥これまでに5回の教員研修を実施した。今後2回の研修を実施する予定。	今年度は、各教員が本校独自の探究的学びにつながるカリキュラムの構築に注力しなければならなかったため、限られた人数の教員で礼拝や宗教行事を運営せざるを得ない状況であったが、次年度は複数の教員が協働して建学の精神の理解につながる諸活動を計画・実施していきたい。	コロナの問題で難しい面はあるが、聖隷グループには多くの社会福祉施設があるので、そこでの活動を通して学べることもあるのではないかと。学校の近くにも施設があるので、施設を訪問する”労作”活動に取り組んでみてはどうか。	S ・ A ・ B ・ C

- 目指す学校像
  - 育てたい児童像
- キリスト教精神の隣人愛を基に、日本文化を理解した上で、グローバル社会に貢献できる児童の育成を目指す。
- ① 奉仕活動や学校活動を通して、他人を思いやる心や行動を養う。
  - ② 一人ひとりの児童にとって、主体的・能動的な学習が成り立つ力を養う。
  - ③ 身の回りの現象を題材にしながら、教科の枠をこえた探究学習で、探究力、思考力、コミュニケーション力や表現力を養う。
  - ④ 母語の日本語を重視した上で英語イマージョン教育を行うことによって、二言語習得を目指し、多様な見方や場に応じた思考・判断ができる人材を育てる。
  - ⑤ 主体的に学んでいく力や自信をもって挑戦していく自己効力感の高い人材を育てる。

「自己評価」及び「評価」欄の評価： S「優れている」、A「良い」、B「おおむね良い」、C「要改善」

項目	自己評価	中長期目標	今年度の目標	取組内容	評価指標	自己評価			学校関係者評価	評価		
						中間評価	達成状況	改善方策				
児童理解	S ・ A ・ B ・ C	ユニークで個性豊かで、しかも多様な児童が、多く学んでいる本校の特徴を理解して、児童一人ひとりが特性を活かした学校生活を楽しく送れるように、教員が資質・力量を高める研鑽を積み、児童理解を進めていく。	・スクールカウンセラーと協力して、児童理解を深める。 ・支援員によるサポート体制を築く。 ・児童理解を深めるための教員研修を行う。	①スクールカウンセラーと教員との間での情報交換を定期的におこない、児童・保護者に寄り添った児童指導を行う。 ②支援員を常時配置し、カウンセラー・教員との情報交換を密にし、児童指導に役立てる。 ③児童指導に関する研修会を実施する。	①カウンセラーの協力を得て、児童・保護者に寄り添った児童指導ができたか ②効果的な情報交換が行われ、支援員による児童指導が適切であったか ③児童指導に関する研修会が行われ、効果を上げたか	①毎週月曜日午後2人のカウンセラーに来てもらっていて、希望している児童・保護者へはかなりの指導ができています。 ②特定の児童に関して、カウンセラー・2担任・養護教諭・管理職が参加してのケース会議を開き、対応策が検討できた。 ③児童理解に関する先生方への研修会は開催できなかった。	3項目の先生方へのアンケート結果は、 ①「カウンセラーの協力を得て、児童・保護者に寄り添った児童指導ができた」のは65% ②「効果的な情報交換が行われ、支援員による児童指導が適切であった」のは37% ③「児童指導に関する研修会が行われ、効果を上げた」のは62%	今後、発達支援コーディネーターを置き、個々のケースに対し、より有効なサポートができる体制を構築していただくことが望まれる。 児童指導に関する研修は次年度も継続し、定期的実施する必要があります。	37%だった②の原因が、効果的な情報交換が行えなかったからなのか、支援員による児童指導が適切でなかったのか分類して明確にして今後の対応を検討すると良い。 2年保護者の満足度アンケート結果が低いと、2年生で支援が必要な児童が多いのはリンクしているので、しっかりと対策する必要がある。 児童指導に関しての対策は、優先順位をつけて、複数年で取り組むのが良いのではないかと。個別の支援計画も重要である。	S ・ A ・ B ・ C		
		シラバス作成	S ・ A ・ B ・ C	各学年とも年間6つの教科の枠をこえた探究テーマに取り組むと同時に、児童学習指導要領に記載されている各教科の学習項目を学習する条件を満たす必要がある。これらの学習を実施するために、きめ細かい年間の学習指導計画を作成する。	教科の枠をこえた探究学習は、上記探究活動で記載した内容をシラバスとする。探究学習での学習項目を、6月中に決定し、各教科で学習する項目を抽出した上で、7月には各教科のシラバスを作成する。	①探究学習のシラバスは、大枠を、探究指導部が作成し、詳細な内容は各学年の担当者が作成する。 ②各学年の教員で、教科の担当を決め、その教科の1年分のシラバスを期日までに作成し、保護者に公開する。 ③シラバスに沿って、探究活動や各教科の教科学習をおこなう。 ④学習事項の児童への定着を図る。	①探究学習のシラバスが作成されたか ②各学年・各教科のシラバスが作成され、保護者に公開できたか ③シラバスに沿って、授業が展開できたか ④児童にとって、学習が成立していたか	①7割ほど完成した段階である。 ②各学年・各教科のシラバスはほぼ完成したが、まだ保護者に公開できていない。近日中に公開の予定。 ③ほぼできている。 ④学習事項の児童への定着に関しては、まだ十分とは言えない状況であり、今後も改善が必要である。	①②各学年の探究学習および各教科のシラバスは完成し、11月10日に保護者に公開した。 ③④に関する先生方へのアンケート結果は、 ③「シラバスに沿って授業が展開できた」のは、81% ④「児童にとって学習が成立していた」のは、79%という回答であった。	各教科の学習内容は、探究学習で扱う学習内容の影響を受けるので、シラバスは毎年度更新が必要となる。各年度のシラバスの蓄積が更に良いシラバスを構築していく構造とすることが望まれる。 保護者の視点でのシラバスのあり方の検討も加えたい。 また、探究的な取り組みによって児童がどのように変容したのかを確認する方法の開発も急ぎたい。	公立の小学校ではシラバスを作成していないので、SCESで作成しているシラバスが、そもそも教員用なのか保護者用なのかを明確した方が良い。 保護者用には、今年度ほど詳細なものはないのではないか。 シラバスは年度の早い段階で保護者に示していくことが望ましい。 実践をPDCAサイクルで改善につなげていく必要がある。 児童の変容を確認する方法としては、公立で行っているキャリアパスポートの活用が役立つのではないかと。	S ・ A ・ B ・ C
				保護者会	S ・ A ・ B ・ C	いわゆるPTA活動にみられる保護者会組織としての既存概念にとらることなく、学校と協力しながら、保護者が中心となる自主的な活動が可能となる、自由参加型の保護者会設立の環境作りを整え、保護者会設立を促す。	・中長期目標にあるような保護者会の設立を促す。 ・保護者会の参加者を募る。 ・保護者会の役員を決める。 ・役員が中心となり、規約を制定する。 ・規約に基づき、保護者会の活動を始める。	以下の項目に関して、保護者会役員と教員で、進捗状況をチェックし、保護者会の活動を見守る。 ①規約作成 ②役員会内の役員の決定 ③全体への周知 ④支援研究グループと分科会の発足 ⑤支援研究グループと分科会の活動開始。	①規約が完成したか ②役員が決定したか ③保護者会での検討状況を保護者に伝えたか ④保護者の期待通りに分科会が発足できたか ⑤充実した活動ができたか	①②暫定的な役員会が組織され、保護者会の完成に向けて検討を重ねている段階である。 ③暫定の役員会の活動報告は、その都度、全保護者が見られるように報告している。 ④分科会(ワーキンググループ)はできつつあるが、まだ本格的な活動には至っていない。 ⑤まだ充実した活動にはなっていない。	①暫定規約が完成し、公式規約へ移行する準備ができた。 ②クラス役員の中から執行委員が決まり、保護者会の組織づくりを行った。 ③役員会の活動報告は、その都度、全保護者が見られるように報告されていた。 ④いくつかのワーキンググループが活動を行うことができた。 ⑤保護者会の活動が形となって行われるようになってきた。	コロナ対策を余儀なくされ、活動が限定的にならざるを得なかった。保護者の手による組織作りはほぼできたので、今後は実際の活動が充実されていくものと思われる。

「自己評価」及び「評価」欄の評価： S「優れている」、A「良い」、B「おおむね良い」、C「要改善」